



ある僧侶とのかかわり —北タイの村での15年

馬場 雄司

(ばば ゆうじ)

京都文教大学教授

仏教者としてキャリアアップ

タイ北部ナーン県のある村に通い始めて一五年あまりになる。一九九〇年、チェンマイ大学留学中、わたしはそこで一人の少年僧に出会った。それ以来、この僧侶とのつきあいが続いている。

この村の調査を始めたとき、村のことはや生活についてあれこれと教えてもらい、調査に同行してもらったことも多かった。彼が二〇歳を迎え正式な僧侶となり、中学校前期(日本の中学にあたる)の義務教育化の動きによって、隣村の寺院に開かれた少年僧のために中等教育をおこなう学校で仏教について教えるようになった。一方、それと並行して、自らも通信教育によって中学校卒業(日本の高卒にあたる)の資格をとり、ついで、僧侶が多く学ぶマハーチュラロンコン仏教大学に入学する。

少年僧のころの彼は、成人して正式な僧侶になったあと、しばらくしてから還俗し、普通の村人として暮らしていくと語っていた。しかし、彼は仏教者としてのキャリアをアップさせる方向へと進んだ。教育の普及にともない、後進の僧侶の指導という立場に立ち、わたしの調査にも参加するなかで、次第に地域が抱える問題などに興味を抱いていくようになったことが、彼をそ

うした方向へすすませた要因であった。わたしは、この村の出来事や文化について調べていた。そして彼は、それを好奇心で

協力していた。ひとつの地域にかかわるわたしと彼の立場は異なる。わたしの調査はけっして地域の人びとの役に立つことを意図しておこなわれたものではない。しかし、彼の目には、自らが属する社会・文化において見過ごしていたものが見えたのである。この経験は、わたしに「調査をすること」と「協力をする」との関係を考えさせることとなった。

役に立とうとして焦って失敗することがある。役に立とうと焦らずに役に立つこと、外部者との自然な接触が地域の人びとに自らを思い起こさせるようなかわり方(自然治癒力を覚醒させるような)を、開発の実務家のような「役に立つこと」を目的とする人びとと考えるいくことにわたしは関心をもつようになった。

互いに触発されながら

その後彼は大学を卒業し、三〇歳を過ぎたころ、隣村にある僧侶のための中等学校で校長を務めることになり、現在にいたっている。隣国ラオス北部の古都ルアンパバーンにならって、町の人びとの生活も含めて世界遺産化をねらうナーン市であるが、その委員会にも彼は顔を出するなど、地元の重要な人物となっている。

一九九〇年代の経済成長は、村の生活を大きく変化させた。フィールドを訪れた当初は、電話局が郡にひとつあるだけだった

が、IT化や携帯電話の普及した現在、フィールドについての疑問を、日本から携帯電話やメールで簡単に現地にあずねることもできるようになった。

件(くだ)の僧侶からは、急速に変化する社会で、伝統的な文化が次第に失われつつあることを憂う発言がしきりに聞かれるようになった。しかしながら、彼はけっして新しいものを拒んではない。それどころか、とりわけコンピューターには明るく、また、村人の電化製品の修理もしばしばうけている。彼の今日の姿に何がしかのきつかけを与えたわたしは、伝統的文化の保護に目をむけ、新しいものを否定しない彼の今後、どこか期待をしている。これから、わたしが何か指示をしたり、何かしてあげたりするというのはなく、あくまでお互いに触発されるものがあることを期待してかわつていきたいと思っている。



説教。僧侶の村落での活動